

戦争はぼくをおとなにした

小川未明

青空文庫

まだ、ひる前まえで、あまり人通りひととちのない時分じぶんでした。道の片かたがわに一軒けんの染め物店そものてんがありました。表おもてへ面めんした、ガラスのはまった飾り窓かざまどには、若い女わかおんなの人がきるような、はでな反物たんものがかかっています。それだけでも、通とおる人々ひとびとの足あしをとめて、目めをひくに十分ぶんといえますが、もう一つ、この窓の内まどうちへ、セルロイド製せいの、大きなだかのキューピーがかざられて、いつそうの注意ちゅういをひきました。キューピーのからだの色いろは、うす赤あかく、二つの目めは、まるくまつ黒くろでした。この健康けんこうそうな赤ん坊あかぼうほどもある人形にんぎょうは、そのひょうきんな顔かおつきでは、いまにも、足音あしおとにおどろいて、目めをくるくるさし、通りかかる人ひとになにか悪口わるくちをいって、いたずらをしかねまじきふうに見みえました。つい無心むしんできかか人ひとまで、その笑わらいにつりこまれるくらいだから、わんぱくざかりの子こどもらが、なんでこれを見て、なんともいわぬはずがありました。

いずれは、この近所きんじよの子こどもたちでした。ふたりづれの男おとこの子こが、どこからか往來おうらいへ出てきました。どちらも六つか、七つぐらいです。キューピーに目めをとめると、たちまち窓まどのそばへ寄よつてきました。

なんと思おもったか、ひとりの子こは、いきなり両足りょうあしをひらいて、大きな目めをいからし、

キューピーのまねをして、人形にんぎょうとにらめっこをしました。

他のひとりたは、また、自分の顔じぶんかおをガラスにおしつけて、できるだけ、よく見ようとしていました。しかし、なにをしても、キューピーには、手てごたえがありませんでした。ふたりは、これでは、こちらがばかにされるような気がして、腹立はらだたしくなりました。

「やいキューピーのばか！」と、ひとりは、手てをふりあげて、なぐるまねをして、みせました。それでも、キューピーは、だまっています。

「こら、石いしぶつけるぞ！」

このとき、とつぜん、もうひとりの、男の子おとこが、

「この、キューピー、おとなりのユウ坊ぼうみたいだよ。」と、笑わらいでした。

「ユウ坊ぼうって、おりこう。」

「う、うん。」

「しようべんたれの、うんこたれなの。」

「はっ、はっ、はっ。」

そういつて、ふたりは、顔かおを見合みあって、さもおもしろそうに、笑わらいました。青い空あおそらは、さわやかに、よく晴はれています。深い、深い、水色みずいろがかって、たれさがる

あちらには、遠く木立の枝が黒く、大きな森の、頭にさしている、かんざしのごとくみえました。そして昨夜の霜が、まだ光つて枝先に凍りついているのが、日の光に、銀のごとくかがやいていました。こうして、冬の間、じつとして、眠っていた自然だけれど、もうどこことなく、じきに目をさましそうなけがしました。

このとき、突然、店の大きな戸があいて、おかみさんが、顔を出しました。

「みんないい子だから、土のかわくまで、あつちへいつて、お遊びなさい。霜だけで、ころぶと着物がよくれますからね。」といいました。

ふたりは、これをしおに、ここをはなれ、道普請の砂利がつんであるほうへ、あるいていきました。

そのとき、清吉は、ちょうど染め物屋の前を通りかけていました。かれは、まだ十歳ぐらいの少年であります。この朝、母のいつけで用たしにいく途中でした。

いまゆかいそうに、とんでいった、小さな子どもたちの姿を見て、かれは、自分にもかつてあんな時代があつたと思うと、そのころのことが、一つ一つ目に浮かんで、すべて楽しいことばかりだったような気がしました。ことに、父親が、戦争にいかず、家ではたらし、また家も焼けなかったら、その楽しい生活は、いまでもつづいて、自分は、し

あわせであつたろうと思うのでした。

かれは、昔あそんだ、友だちの顔などを、ぼんやり記憶から、呼びもどしていると、ふいに、

「おぼけがきた。」という、さっきの子どもたちの高い声がして、その空想は破られたのでした。

清吉は、顔をあげて、声のする方を見ました。

「おぼけがきた！」

「こわいよう、おぼけがきた！」

ふたりの子どもは、道の上であつた、おばあさんに向かつて、ちようど、臆病犬が、遠吠えをするときのように、ののしっているのです。

これを見た、清吉は、なにごとだろうと思ひ、できるだけ早く、そこへと近づいたのです。

「あつ、おばあさんが泣いている。」

かれは、そうさすると、胸がどきどきとして、急に目頭が熱くなりました。

「いったい、どうしたことだろう？」と、清吉は、立ち止まって、このありさまを見つ

めたのです。

さむいけれど、空気は、音のはねかえるほど澄^すんで、さえきっていました。また、ふたりの子供^{こども}は、ぴちぴちとして、これから伸びようとする盛り^{さか}りだったから、なにをみても、おもしろく、みなれぬ姿^{すがた}は、おかしかったのです。

美しいものには、すぐに飛び^とついたであろうし、みにくいものは、すべておばけにみえたのでありました。ふたりの子どものみずみずしきにくらべて、このおばあさんは、またなんと、暗^{くら}く、しなびきって、みじめでありましたでしょう。だれでも、年^{とし}をとると、これ^これがしぜん^{すがた}の姿であり、この姿は、やがてはてしない暗^{くら}い方^{ほう}へ向^むかって歩^{ある}くものだということをすくなくとも、この子どもには、知^しりようがなかったのです。どこか、森^{もり}の中^{なか}のお墓^{はか}からでも、出^でてきたおばけのようにしか見えませんでした。

「やあ、おばけが泣^ないてるぞう。」

「泣^ないたりして、おかしいな。」

このとき、清^{せい}吉^{きち}は、

「こらー！」と、遠^{とお}くから、どなりました。

「なんで、おばあさんに、悪^{わる}口^{くち}をいうのだ！」

かれは、顔をまっ赤にして、大きな声で、しかると、子どもは、おどろいて、あちらへ逃げていつてしまいました。

おばあさんは、おばけだといわれたのが、くやしいのか、それとも、自分の姿が、そんなに見られるのは、もう先が長くないからであろうときとって、悲しいのか、清吉は、おばあさんの、さめざめとして、泣くありさまを見ただけで、自分まで、罪をおかしたように、からだへ冷たい水をかぶるような思いがしました。

かれは、おとなのこうして泣くのを見る記憶が、これで二度あります。その一つは、おあさんでした。おかあさんが、あちらの赤い空をみながら、自分の家が、焼けてしまつたといつて、しくしくないたときです。それから、もう一つは、いまおばあさんが、こうして、泣くのを見たことです。かれは、おばあさんのそばへ近づくのに、勇気がいりました。

「おばあさん、かんにんしておやり。まだ小さいんで、なんにもわからないのだから。」と、清吉は、かろうじていいました。こういつておばあさんを、なぐさめるつもりでした。

けれどおばあさんは、だまって、泣きつづけています。下を向いて、目から、にじみで

る涙を、やせた手でふいていました。

「小さくて、まだなんにもわからないのだよ。」と、かれは、同じことをくりかえすより、いうことを知りませんでした。

「わたしも、家を焼かれて、身寄りはない、知り合いのところ、やっかいになっているが、寒さのため、持病のリウマチがでて、お薬を買いにいった……。」「と、あとの言葉は、よくきこえず、また、泣いていました。

清吉に、おばあさんの心持ちが、わかるような気がしました。だから、自分の言葉に力をいれて、さも自信ありげに、

「ねえ、おばあさん、おばあさんが、黒い頭巾をかぶって、つえをついているので、おばけと思つたのだよ。きつと、そうだよ。いくら寒くても、こつちでは、めつたに、頭巾なんかかぶらないから。」

こう、清吉が、いうと、はたして、おばあさんは、胸のわだかまりがとけたらしく、やつと顔を上げました。その顔には、しわがよって、目は、落ちこんでいましたが、かすかに口のあたりへ、笑いをうかべて、

「そうかいな、わしのいなかでは、冬になると、みんな頭巾をかぶるが。ああ、それで、

おばけといったのかいな。」と、力ちからのない声こえで、いいました。

「おばあさんきつとそうですよ。だから、かんにんしておやり。」と、清吉せいきちは、かれのせいっぱいのちえをしぼって、なぐさめました。

「そうだったかいな。」と、おばあさんはもう一度しなびた手てで、目のあたりをこすると、ふたたび、つえをつきつき、腰こしをまげて、歩きはじめました。

霜しものとけかけた、ちかちかと光ひかる、一筋ひとすじの道みちが、はるかかなたの、煙突えんとつや、木立こだちの、黒い棒くろぼうきれをたてたごとくかすむ、地平線ちへいせんの方ほうへとのびていました。おばあさんは、どこまでいくのであろうか。その道みちを、だんだんと遠とざかってしまいました。清吉せいきちはぼんやり、一ひとところに立たって、そのあわれな影かげを見送みおくったのでした。

「戦争せんそうが悪いのだ！」

かれの口くちから、しぜんに、この言葉ことばが、ついて出でました。かれは、空想くうそうにふけりながらあちこちと、道みちを曲まがって歩あるくうち、いつしか電車でんしゃの通とおる、幅はばの広い路みちへ出でたのでありました。

あの夜よ、ここを通とおったのだ、かれは、逃にげた日ひのことを思おもい出だしました。小さな弟ちいを負おとうとおっている母ははに手てをひかれて、燃え狂くるう、火ひに追おわれながら、この道みちを、通とおったのでした。

やはり、町まちから郊外こうがいへのがれる、人々ひとびとの群れとまじって、逃にげたのでした。

「もう、ここまでくれば、だいじょうぶだ。」

小高い丘こたかおかのようなどころへたどりつくとき、みんなは、こういつて休みました。

一方ほうでは、火ひのむちで打うたれて、狂くるうように、烈はげしい風かぜが、暗くらく、青あおざめた、夜よるの空そらを苦しくるそうな叫さけびをあけて、吹ふいていました。風かぜは、すこしの間あいだ、一息ひといきいれると、その後ご

は、かえって、すさまじい勢せいりよく力ちからをあらわしました。そのたびに、たんぼのむぎや、ま

わりにしげる木立こたちの枝えだが、いまにもちぎれて、闇やみの中なかへさらわれそうにみもだえたので

す。焼やけくずれる町まちでは、花火はなびのごとく、火ひの粉こなが高たかく舞まい上あがり、ぴかりぴかりとして、

凱歌がいがを上げあるごとく、ほこらしげにおどっていました。

人々ひとびとは、あちらの木きの下したに、一ひとかたまり、こちらのやぶ蔭かげに、一ひとかたまり、いずれも

押しだまつて、ただ目めだけを、赤あかく焼やける町まちの方ほうへ向むけて、おそろしいありさまを見守みまもつ

ていました。そのうちひとり、ちがったところを指さすと、みんなが、その方ほうを向むきまし

た。へびの舌したのように、紅あかい炎ほのおが、ちろちろと、黒くろい建たてもの物の間あいだから、上あがりはじめたば

かりです。

と思おもううち、見みる見みるすそをひろげて、一方ほうの火ひと合がっし、たちまち、あたりは火ひの海うみと

なつてしまいました。

「もう、さつきから、どれほど焼けたろう。」

「さぞ、人がたくさん死んだろうな。」

こんな話し声がきこえました。清吉は、いくらがまんしても、からだがふるえて、ぞくぞく寒けがしました。かれは、こんなにくじのないことでどうしようと、自分をはげましました。

「おかあさん、あつちの空をごらん。」と、とつぜん、気を転じようと、清吉は、さけびました。

「どうしたの。」と、母は、ききました。

「あそこに、星が出ているよ。」

そこだけが、いつもの静かな夜の景色と、変わりがなかったからです。そこだけを見るなら、地上で、いま、町が焼け、人が死んでいるということが、信じられない気がしました。

そして、このすさまじいあらしにも、猛り狂う炎にも、無関心でいられる星の世界が、あまりにも、ふしぎにみえたのです。色とりどりの星が、たがいに仲よくして、たのしい

ことでもあるのか、ささやき合うような、また、おどけて、まばたきをしたり、目と目でものをいったりしているようなのが、なんとなく、うらやましかったのでした。自分たちも、星の都へいったら、おとうさんは、戦争にいかなくてもよかつたし、いつもみんなが、いっしょに楽しく暮らすことができたであらうにと思いました。

ちやうど、丘の下は、麦ばたけでした。ふさふさした穂が、風のために、波打っていました。

「坊や、なにしてるの。」

母の背中、目をさました、小さな弟が、頭といっしょにからだをゆり動かしているのに気づいて、清吉は、弟のほうをば、見ました。すると麦ばたけで、破れがさをかぶつて手足をひろげた、鳥追いかかしが、夜も休まずに、番をするのを、弟が、まねていたのでした。

「人が、こんなに心配しているのに、坊やはわからないんだよ。」と、母は、目をふいていました。こうきくと、清吉は、なんだか弟が、かわいそうになりました。いたわつてやらなければならぬと思いました。

しだいに、東の空が、黄色みをおびて、夜明けが近づいたのであります。この時分から、

どこか小川のふちで鳴く、かえるの声が、高く、しげくなりはじめて、さながら、雨が降る音のように絶え間なくきこえてきました。

ひとり去り、ふたり去り、しのびやかに、立ち去る人たちがつづきました。清吉も、こうしているのが心細くなつて、母親のたもにつかまり、

「もう、帰ろうよ。」といいました。

母は、いつまでも、泣いていました。

「おまえ、帰ろうつて、どこへ帰るの。もうお家はないんだよ。」と、母の声は、小さく、ふるえました。

「そう、だったか。」と、清吉は思った。そしてこのときほど、自分の母をいたましく、感じたことは、なかったのです。

「義雄ちゃんのおじいさんが、焼けたら、いつでもこいといったよ。ぼくは、なんでもして、これからおかあさんのおてつだいをするから。」と、かれは、胸の中が熱くなつて、母を元気づけようとしても、わずかに、これだけしかいえなかったのです。

しかし、母は、なんとも答えず、いつまでも泣いていました。かれは、これではならぬと知つて、

「おとうさんが、帰れば、新しい家をこしらえてくれるよ。」と、つづけていいました。しばらくすると、母は、泣きやんで、そでで顔をふきながら、

「おまえがあるから、おかあさんは、もう、けつして泣きませんよ。」と、母は、いったのでした。

清吉は、あの日のことを思い出しました。もしそうでなかったら、きょう、おばあさんをも、なぐさめようとしなかったでしょう。

「ぼくは、もうおとななんだから……。」

かれは、はりきった気持ちで、胸をそらし、両足に力を入れて、電車道を歩いていったのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「赤い雲のかなた」小峰書店

1949（昭和24）年1月

初出：「童話」

1947（昭和22）年2、3月合併号

※表題は底本では、「戦争《せんそう》はぼくをおとなにした」となっています。

※初出時の表題は「戦争は僕を大人にした」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

戦争はぼくをおとなにした

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>